



TITLE:

泌尿器科におけるプロチジン酸 (17190RP)の使用経験

AUTHOR(S):

徳永, 毅; 進藤, 和彦; 足立, 望太郎

CITATION:

徳永, 毅 ...[et al]. 泌尿器科におけるプロチジン酸(17190RP)の使用経験.
泌尿器科紀要 1975, 21(10): 965-970

ISSUE DATE:

1975-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121893>

RIGHT:

泌尿器科領域におけるプロチジン酸 (17190 RP) の使用経験

長崎大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 近藤 厚教授)

徳 永 毅

健康保険諫早総合病院泌尿器科

進 藤 和 彦

十善会病院泌尿器科

足 立 望 太 郎

CLINICAL APPLICATION OF PROTIZINIC ACID
(17190RP) IN UROLOGY

Tsuyoshi TOKUNAGA

*From the Department of Urology, School of Medicine, Nagasaki University**(Chairman: Prof. A. Kondo, M. D.)*

Kazuhiko SHINDO

From the Department of Urology, Isahaya General Hospital

Botaro ADACHI

From the Department of Urology, Jyuzen-kai Hospital

Protizinic acid was administered to the patients with cystitis or prostatitis. A clinical evaluation of this drug was made as follows.

1) Clinical effect was observed in 30 out of 37 trial patients, thus effectiveness rate being 81.0%.

2) The drug was effective in 80.0% of cystitis patients and 85.7% of prostatitis patients, although excellent response was seen rather in the cystitis group.

3) As to side effect, slight gastrointestinal disturbance was noted in four patients. No hematological or biochemical abnormalities were induced by the administration of this drug.

はじめに

非ステロイド系消炎・鎮痛剤は各科領域において数多く使用されている。フランス、ローズ・ブーラン社研究所で開発された新しい非ステロイド性抗炎症剤であるプロチジン酸 (17190 RP) についても整形外科¹⁾および婦人科領域における使用経験の報告がある。

今回われわれはプロチジン酸の泌尿器科領域²⁾における臨床効果を検討する機会を得たので、その結果を報告する。

試験方法

1) 使用薬剤

本剤は下図の構造を有する非ステロイド系消炎・鎮

痛剤である (Fig. 1)。

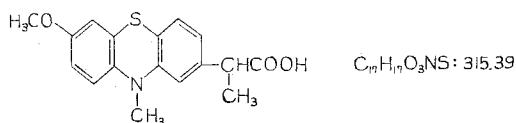


Fig. 1. 7-methoxy- α , 10-dimethylphenothiazine-2-acetic acid

動物実験によれば、本剤はフェノチアジン系薬剤ではあるが、従来のクロルプロマジン等と異なり中枢に対する作用はなく^{3,4)}、抗炎症作用、鎮痛作用はフェニールブタゾン、メフェナム酸と同等またはより強力であるといわれている⁵⁾。また催奇形作用もなく⁶⁾慢性関節リウマチに対する効果⁷⁾が認められている。

2) 対 象

1974年12月から1975年5月にいたる半年間に長崎大学医学部附属病院、諫早病院および十善会病院の泌尿器科をおとずれた患者で膀胱炎または前立腺炎と診断された患者を対象とした。その内訳は男子28例、女子9例計37例で年齢は17~79歳平均年齢は41.7歳であった。なお妊婦、小児、特異体質者、肝・腎障害を有する者、重篤な消化器障害の既往歴を有する者などは対

象から除外した。

3) 投与方法および投与期間

プロチジン酸（1カプセル中プロチジン酸 100gm含有）を1回2カプセル、1日3回毎食後投与した。投与期間は3~10日間、平均6.8日であった。なお、対象疾患の性質上いちおう抗生剤との併用を原則とした。

4) 調査方法および効果判定

Table 1. 症 例 一 覧 表

No.	症 例	性別	年齢	疾 患 名	投与量 (mg/日)	投与 日数 (日)	併 用 薬 (mg×日)	効果判定	副作用
1	T. H.	M	28	膀胱炎・急性副睾丸炎	600	7	アモキシリン 1500mg×7日	著 効	
2	H. T.	M	79	膀胱炎	"	7	" 1000×7	有 効	
3	T. M.	M	41	膀胱炎・急性副睾丸炎	"	10	" 1500×10	著 効	
4	S. H.	F	27	急性膀胱炎	"	5	" 1000×5	著 効	
5	T. F.	F	29	"	"	4	" 1000×4	有 効	
6	A. M.	F	17	"	"	3	" 1000×3	著 効	
7	O. F.	M	76	急性膀胱炎・急性副睾丸炎	"	10	" 1000×10	やや有効	
8	T. M.	F	71	術後膀胱炎	"	7	ミノマイシン 200×7	無 効	胃腸症状(+)
9	Y. K.	M	77	膀胱炎・前立腺肥大症	"	7	アモキシリン 1000×7	有 効	
10	S. T.	M	66	膀胱炎・前立腺癌	"	7	" 1000×7	無 効	
11	M. Y.	F	38	膀胱炎	"	7	ウロサイダル 3.0g×7	無 効	
12	Y. M.	M	50	急性膀胱炎	"	5	アモキシリン 1000×5	有 効	
13	M. T.	F	35	"	"	7	" 1000×7	有 効	
14	T. Y.	M	35	"	"	7	セファレキシン 1500×7	著 効	
15	Y. K.	M	45	術後膀胱炎	"	7	ウロサイダル 3.0g×7	無 効	胃腸症状(+)
16	Y. K.	M	47	"	"	7	セファレキシン 1500×7	やや有効	
17	Y. Y.	F	27	慢性膀胱炎	"	7	バナシッド 6T×7	やや有効	
18	K. H.	F	62	急性膀胱炎	"	7	" ×7	有 効	
19	H. U.	F	51	慢性膀胱炎	"	7	ウロサイダル 3.0g×7	著 効	
20	J. N.	M	61	急性膀胱炎	"	7	セファレキシン 1500×7	著 効	
21	I. Y.	M	28	慢性前立腺炎	"	7	アモキシリン 1000×7	有 効	
22	T. Y.	M	26	"	"	7	" 1000×7	有 効	
23	S. M.	M	35	前立腺炎・副睾丸炎	"	7	ミノマイシン 200×7	著 効	
24	Y. O.	M	38	慢性前立腺炎	"	4	アモキシリン 1000×7	やや有効	
25	N. M.	M	26	"	"	10	セルニルトン 6T×7	やや有効	胃腸症状(+)
26	K. K.	M	37	"	"	7	{ トランサミン 6T×7 " 6T×7 " 6T×7	やや有効	
27	T. N.	M	41	"	"	7	{ " 6T×7 " 6T×7	やや有効	
28	Y. T.	M	25	急性前立腺炎	"	7	アモキシリン 1000×7	やや有効	
29	H. I.	M	45	"	"	7	セファレキシン 1500×7	有 効	
30	Y. A.	M	22	慢性前立腺炎	"	7	{ セルニルトン 6T×7 トランサミン 6T×7	無 効	
31	H. Y.	M	30	"	"	7	{ セファレキシン 1000×7 セルニルトン 6T×7	やや有効	胃腸症状(+)
32	H. Y.	M	58	"	"	7	セルニルトン 6T×7	無 効	
33	S. A.	M	23	"	"	7	" 6T×7	やや有効	
34	T. K.	M	27	"	"	7	アモキシリン 1500×7	やや有効	
35	Y. T.	M	67	膀胱炎・前立腺炎	"	7	セファレキシン 1500×7	無 効	
36	T. H.	M	41	"	"	7	アモキシリン 1000×7	著 効	
37	F. I.	M	65	"	"	7	セファレキシン 1500×7	著 効	

自覚症状として排尿時疼痛，排尿後不快感，尿意頻度を，他覚症状として圧痛，腫脹，尿所見（白血球，赤血球，細菌，蛋白，糖，ウロビリノーゲン，pH），また必要に応じて膀胱鏡による検査をおこない，各担当医の判断により総合的に著効，有効，やや有効，無効の4段階の判定をおこなった。

副作用をチェックするため原則として本剤投与前後に血液，生化学的検査を実施した。

結 果

1) 成績

全症例の内訳は Table 1 のごとく膀胱炎20例，前立腺炎14例，両者併発例3例であった。

全症例37例中，著効10例（27.0%），有効9例（24.3%），やや有効11例（29.7%），無効7例（19.0%）であり著効～やや有効までの有効率は81.0%であった。

疾患別にみると膀胱炎20例中著効7例（35.0%），有効6例（30.0%），やや有効3例（15.0%），無効4例（20.0%）で有効率80.0%であり，前立腺炎14例中著効1例（7.2%），有効3例（21.4%），やや有効8例（57.1%），無効2例（14.3%）で有効率（85.7%）であった。

両者併発例3例中著効2例（66.7%），無効1例（33.3%）であった。しかし著効～有効までの有効率は膀胱炎では65.0%，前立腺炎では21.4%であった。

2) 副作用

全症例37例中4例（10.8%）に心窩部痛，嘔気など

の胃腸症状を訴えたが薬剤投与中止後2～3日以内に症状は消失した。

薬剤投与前後の血液一般および生化学的検査では副作用と考えられる変化はなかった（Fig. 2～12）。

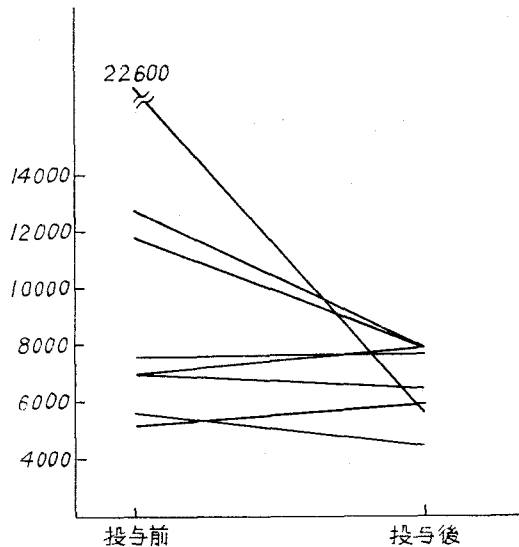


Fig. 3. 白血球数

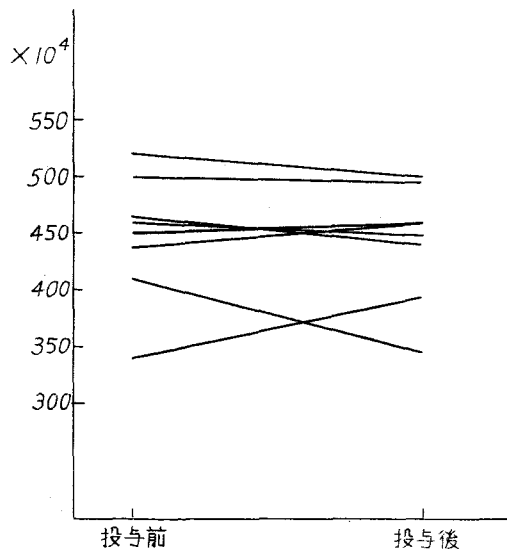


Fig. 2. 赤血球数

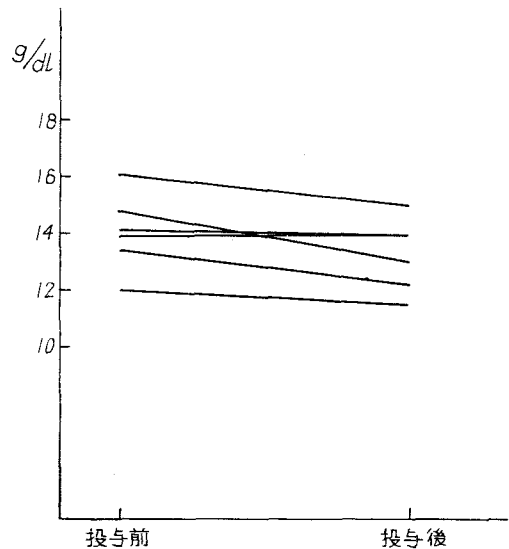


Fig. 4. ヘモグロビン

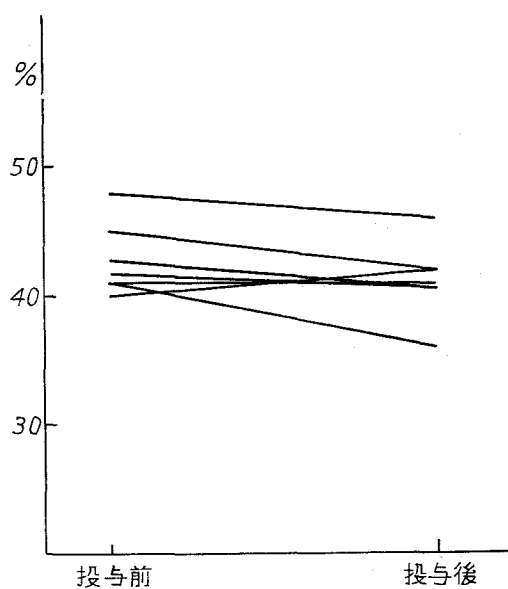


Fig. 5. ヘマトクリット

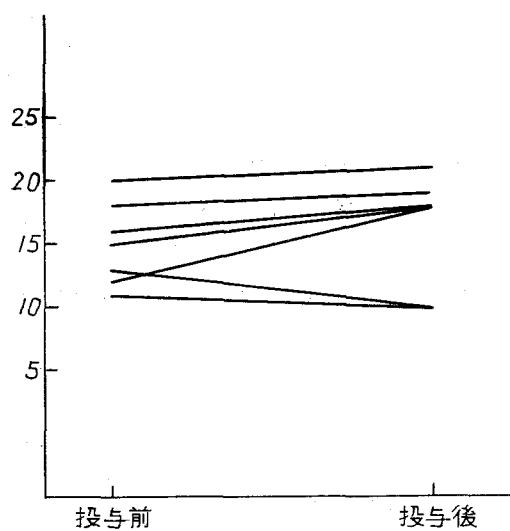


Fig. 7. BUN

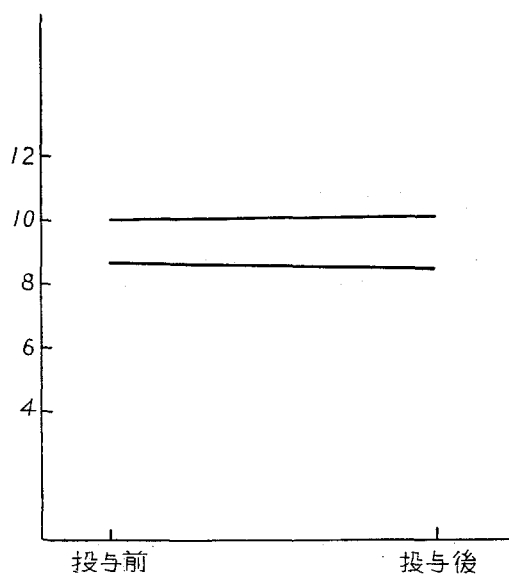


Fig. 6. アルカリフォスファターゼ

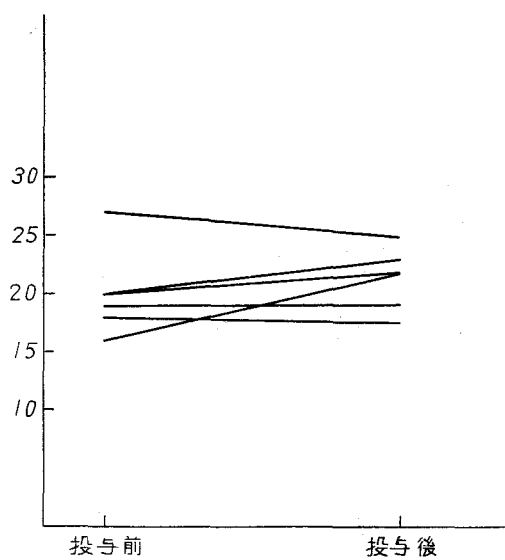


Fig. 8. SGOT

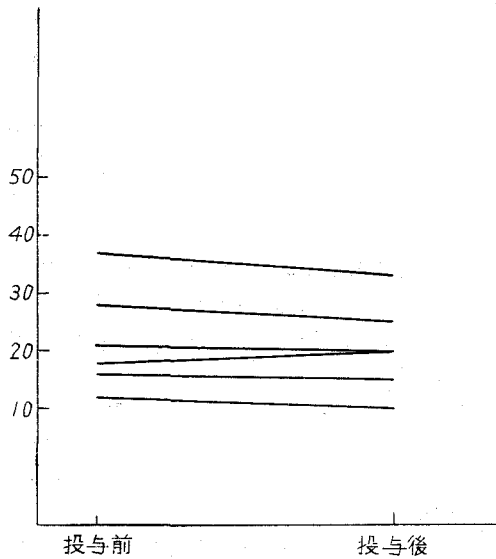


Fig. 9. SGPT

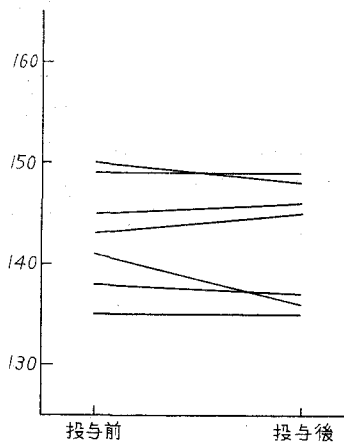


Fig. 10. Na

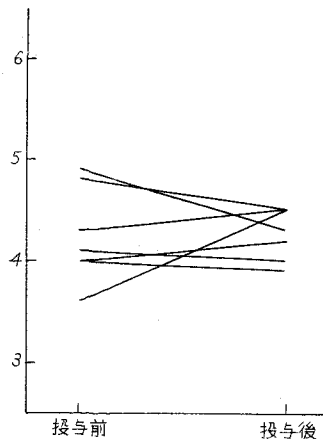


Fig. 11. K

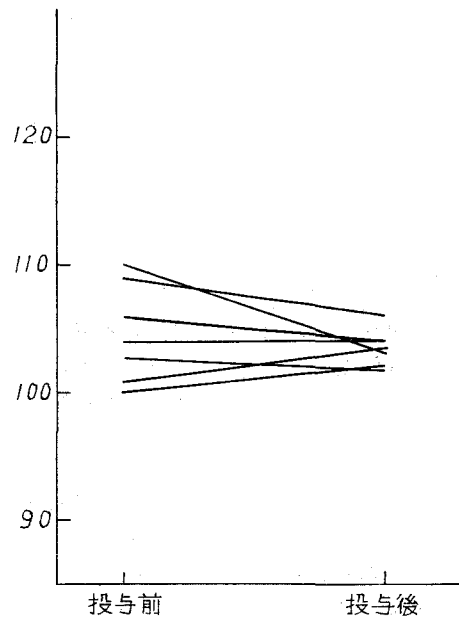


Fig. 12. Cl

考 察

プロチジン酸 (17190 RP) はフランスで1972年9月より発売されており、いくつかの臨床報告^{8)~(12)}があり、抗リウマチ剤として評価がなされている。

今回、われわれは泌尿器科領域における本剤の臨床的評価をおこなうため膀胱炎、前立腺炎の37例に使用した。

われわれの試験成績は全症例においては有効率81.0%を得ており、臨床的に満足のゆくものと考えられる。とくに急性膀胱炎において著効例が多かったが、慢性前立腺炎では著効例は少なかった。

本剤の副作用と思われるものは少数例に軽度の胃腸症状がみられたにすぎず、薬剤投与中止により消失している。血液像、生化学的検査では異常は認められなかった。

今回のわれわれの使用経験からいえることは、本剤は膀胱炎、前立腺炎などに満足すべき臨床効果がみられたことと副作用が少ないことから、今後泌尿器科領域の疾患に使用してみる価値のある薬剤と考える。

ま と め

膀胱炎、前立腺炎に対するプロチジン酸の臨床的評価をおこなった。

1) 試験対象患者37例中30例(有効率81.0%)に臨床的効果を認めた。

2) 疾患別では膀胱炎で有効率は80.0%、前立腺

炎で85.7%であったが、著効例は膀胱炎のほうに多かった。

3) 副作用は4例に軽度の胃腸症状がみられたにすぎない。また血液一般、生化学的検査でも異常は認められなかった。

おわりに、本稿のご校閲をいただいた近藤厚教授に深謝します。

文 献

- 1) 野島元雄・ほか：PRT の変形性膝関節症に対する投与成績，クリニカルレポート，投稿中。
- 2) 西亦勇雄・ほか：非ステロイド性炎症剤 PRT の骨盤内炎症疾患に対する使用経験。クリニカルレポート，投稿中。
- 3) 藤村 一・ほか：PRT 薬理学的研究第2報一般薬理作用。応用薬理，9：267，1975。
- 4) 渋谷 健・ほか：フェノチアジン骨格を有する非ステロイド系抗炎症薬プロチジン酸 (PRT) の比較薬理学的研究。東医大誌，33：143，1975。
- 5) 藤村 一・ほか：PRT 薬理学的研究第1報抗炎症作用および鎮痛作用。応用薬理，9：295，1975。
- 6) 伊藤千尋・ほか：Protizinic acid の毒性研究(第3報) Protizinic acid のマウスおよびラットにおける催奇形性の検討。医薬品研究，6：771，1975。
- 7) 塩川優一・ほか：プロチジン酸 (19190 RP) の投与量水準差に関する二重盲検交叉臨床試験成績。リウマチ，14：121，1974。
- 8) Pieron, R.: Expertise clinique du 17190 RP gélvle. Rapport établi le 26/4/7 (Arrêté du 24/4/70, publié au Journal Officiel du 10/5/70)。
- 9) Beroit, J.R.: Essai d'un nouvel antiinflammatoire en pathologie rhumatismale pirocid 17190 RP; La Revue Médical de Dijon, 8: 131, 1973。
- 10) Delcambert, B.: Etude clinique de l'activité anti-inflammatoire de l'acide protizinique (17190 RP). Lille Medical Actualites, 18: 246, 1973。
- 11) Laborie, G. et.: Essai thérapeutique. L'acide protizinique (17190 RP) en thérapeutique antirhumatisme. Bordeaux Medical, No. 5, 695, 1973。
- 12) Moise, R.: Etude clinique de l'action dans les maladies rhumatismales d'un nouvel antiinflammatoire. Journal de Médecine de Strasbourg, 4: 153, 1973。

(1975年10月20日迅速掲載受付)